

兵庫県淡路市の医師、鈴記好博さん(47)の写真。手県大植町で



7月に開かれた「福幸さらり夏祭り」に、

淡路市や神戸市のボランティア約20人とともに参加しました。祭りは、新たなコミュニティづくりの役割を担っており、おとうと鈴記さんが発案。会場では特産の淡路ビーフも振る舞われ、被災者たちを元気づけました。

岡山市に本部を置く国際医療NGO「AMDA」の兵庫県支部副支部長を務める鈴記

兵庫県淡路市の医師

鈴記好博さん

読売

2012.10.15

支援だよ

特産ビーフで笑顔届ける



淡路ビーフが人気を集めた夏祭り(岩手県大植町で) 鈴記さん提供

さんは東日本大震災の発生直後、AMDAの支援拠点を開設するため現地入りしました。その後も避難所などでの医療活動のため何度も被災地を訪れ、山間部に点在する仮設住宅の住民から「親類がどこに住んでいるのかもわからない」と嘆く声を聞きました。復興に向け少しずつ歩みが進む一方、かつての地域のつながりが希薄になってきているのを感じたそうです。

「被災した住民たちのため

に、新しいコミュニティがつかれないだろうか」。被災地で鈴記さんの思いを聞いたAMDAスタッフたちは、今年春から大植町などの商店街と協力しながら準備。阪神大震災で自宅が全壊した淡路市の精肉会社社長新谷福松さん(68)は、鈴記さんの依頼に「役に立てるのなら」と賛同し、最高級の牛肉約80キを用意しました。

仮設店舗の並ぶ大植町の商店街で7月15日に開かれた祭

りには、避難のために各地の仮設住宅に散った地元住民たちがバスやタクシーに乗って集まり、家族連れら約2000人で大盛況でした。淡路ビーフは炭火で焼かれて振る舞われ、「こんなおいしいお肉は初めて」「明日からがんばっていけそう」と被災者の間に笑顔が広がりました。

「これからも人のつながりを大切に復興のお手伝いをしていきたい」と鈴記さん。祭りに協力してくれた人たちと連絡を取り合い、今後の新たな活動につなげたいと考えています。